瘴気の霧異変

鳴海真央

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

不慮の事故から、幻想入りした人間は名前を失った２０代の女性。

それ以外の記憶はあり、幻想郷にいることも自覚していた。

そんなある日、人妖関係なく狂気や発情を促す瘴気の霧が立ち込める。

女性は霧の影響を受けず、平然と暮らして、面倒だなと思う程度だった。

それからしばらくして、瘴気の霧の影響を受けた妖怪に襲われ、命の危機すらもあったその瞬間、摩多羅隠岐奈が開いた扉に落とされる。

女性は隠岐奈によって、十六夜咲夜と同等の能力である「時間を操る程度の能力」を得ることとなる。

その能力を十分に活かすことに悩んでいると、八雲紫の元へ連れて行かれる。

女性は紫の下で能力の強化を行い、「時間と空間を操る程度の能力」へと変化。

強化された能力を携えて、女性は異変解決の一歩として、博麗霊夢のいる博麗神社へと赴くのだった。

※同作品を「ヘイズル」名義でピクシブに掲載しています。

※この作品は東方Ｐｒｏｊｅｃｔの二次創作であり、ガイドラインを遵守するよう心がけたものです。

また、「ジョジョの奇妙な冒険（第三部から第五部）」「魔法少女リリカルなのは」「ウォーターシップ・ダウンのうさぎたち（主人公の名乗り由来）」ネタが含まれます。

目　次

Stage0. 時間と空間を操る程度の能力 ―――― 1
Stage1. 少女綺想曲 ～ Capriccio ―――― 6
Stage2. いざ、紅魔館へ ―――― 11
Stage3. メイドと血の懐中時計 ―――― 22
Stage4. ツェペシュの幼き末裔と黒い男 ―――― 27

Ｓｔａｇｅ０．　時間と空間を操る程度の能力

（はぁ……今日もお天気は最悪ね）

ボクは幻想入りした２０代の人間の女であること以外は、記憶がない。

ただ、家事をこなしたり、買い出しをしたり、という日常の生活にはなんの支障もないので十分だった。

幻想郷という世界であることは最初になんとなくわかったのだけど……。

この霧は一体なんなのかしら。

そんなことを思っていたある日のこと。買い出しをしていたところ、妖怪に押し倒されてしまった。

妖怪は人間よりも強いので、振りほどけない。

こんなやつに強姦（レイプ）されるなんて嫌と思っていたら、突然できた穴に落ちていった。

「ここは……？」

見たこともない風景。どうしてここに落ちたのだろう。

なんてか、この空間、開いた扉からいろんな景色が見える。おまけに春夏秋冬の自然の風景って感じ……。

そして、金色で髪が長く、冠のような帽子をかぶり、前掛けには北斗七星がデザインされた道士服を着た女性がボクの目の前に現れる。

「いやぁ、危なかったね」

「……あなたは？」

「あぁ、自己紹介がまだだったね。私は摩多羅隠岐奈という」

摩多羅隠岐奈……？

えーと、射命丸文が出してるとかいう新聞に書いてあった秘神？

なんでそんな人がただの人間のボクを？

「えーっと……。どうして人間のボクをこんな世界に引きずり込んだんですか？」

「引きずり込んだは、ちょっと人聞きが悪いな。幻想郷を久しぶりに

覗き込んだら、妙な霧は出ているわ、二人はその瘴気に触れてポンコツになるわで、大変なことになっていてね」
「あー……。それでなんの影響もなかったボクをここに？」
「そうだね。さてと、少し背中を失礼させてもらうよ」
そう言って、隠岐奈さんはボクの背中の扉を開いてきたのだ。
「な、なにを!?」
――次の瞬間。空間が一瞬静止した。
「……なるほどねえ。君の潜在能力は実に面白いな。……でも、後継者には不向きだね。うーん、残念」
「そうですか。すいません」
「いや、君が謝る必要はない。それはまた別の機会に……。で、今回は瘴気の霧の問題さ。あれをどうにしかしてほしい。彼奴のお気に入りである、博麗の巫女も行動不能になっているらしいしな」
博麗の巫女……？
「それに、この世界ならば、瘴気の影響を一切受けない。そういうこともあって、しばらく手を出すことができないからね」
「……なるほど」
「霧は人妖関係なく、幻想郷の土地にいる生命体全員をおかしくさせている。それに気がついたからこそ、私は素早くこの世界に戻ってきたわけさ」
「それで、なーんの影響もないボクに、その、博麗の巫女に変わって、異変を解決してほしいと」
「察しがいいね。私は嬉しいよ。――潜在能力は解放した。あとは、君がどう扱うかだ。……幻想郷を作った一人としてお願いしたい。瘴気を含んだ霧を晴らしてほしい。私が依頼しなくとも、君が彼奴にも会うのであれば、同じことを言うだろうね」
「彼奴？　……えーと、ともかく、ボクが隠岐奈さんに開いてもらった能力でなんとかしてほしい、ということで、いいんですね？」
「あぁ、その通りだよ。それじゃ、元いた場所に帰すよ」
……気がついたら、幻想郷の人里にある自分の家に戻っていた。
（潜在能力……。空間の静止……。まさか、外の世界の時間操作能力

がボクに眠っていたというの？）
隠岐奈さんのいた空間で背中を開かされて、空間が静止したことを感じた。
止められるかを試すため、時間が止まった雰囲気をイメージして念じると。
――風や柱時計の音が聞こえなくなった。
そして、自分の目に映る世界がグレー一色に染まったのだ。
「時が……止まっている……？　そして、時は動き出す！　……なんちゃって」
瞬間解凍するかのように、止まっていた物事がすべて動き出し、カラフルな色合いに世界が戻った。
（そうか……。やっぱり、ボクの能力は時間を操る程度の能力！　そんな、時間を止める吸血鬼じゃねーんだから……。ってなんでこーゆーことは覚えてるんだろうかね？）
自分の名前を思い出せないのに、そんなことは覚えている。正直自分自身に呆れた。
（でも、このままじゃ、どうしようもない。……けど、隠岐奈さんの言っていた『彼奴』って誰だろう……）
はぁ、と、ため息をついていると、今度はなにかに引っ張られるように穴に落ちた。
（またぁ～～～!?）
引っ張られたのは、自分の家と内装が似ている場所だった。
「手荒な真似をしてごめんなさい。事態は一刻を争うの」
「……霧の異変、ですよね」
「あら、知ってたの」
「はい。摩多羅隠岐奈っていう秘神に解決してほしいと頼まれまして」
「……あ～～～、あいつかァ……」
特徴的なリボン付きの帽子をかぶった道士服を着ている、隠岐奈さんよりは体格の大きい女性が言う。
あと、結構おっぱいでかい。びっくり。

「それなら、私が言わんとしていることもわかりますね？」
「博麗の巫女が異変の影響で動けない。かといって自分が手を出してすぐ解決できるものでもない。影響を受けないボクに白羽の矢が立った。……そうですね？」
「ご明察。まさか、先んじられるとはね。それで、貴方はどうしたいの？」
「ボクの背中につけられた扉で、潜在能力が解放されて、時間と空間を静止させられるらしいんですけど、異変解決の役に立つのかさっぱりわからないんです」
　ナイスバディの女性に背中を見せる。
「……なるほどね。貴方の背中の世界は時計だらけだわ」
「だから、時間と空間を静止させられる……」
「そうね。紅魔館のメイドと同じ能力を持っているとは、ホント面白い人間ね」
「それで……えーと、あなたは……？　ボクは名前がないただの女の子です」
「私は八雲紫。幻想郷を誰よりも愛している妖怪よ。……名前がないというのは不便ね」
「仰るとおりなのですが、別になんの不自由もしてないので……」
　ボクが言うと、紫さんはボクの背中の世界に手を突っ込んだ。
「なっ、なにを!?」
「……あら、何かしら、この書物」
　紫さんはボクの背中から取り出したなにかを取り出してなにかを読み始める。
「ねえ、貴方」
「はい？」
　紫さんの方を向くボク。
「うさぎの物語が好きなの？」
　その表紙に見覚えがあった。
「……『ウォーターシップダウンのうさぎたち』!?　八雲さん、それをボクに見せてもらってもいいですか!?」

「え、ええ、いいわよ。あと、紫でいいわ」
紫さんに手渡してもらった書籍をパラパラとめくる。
「紫さん。……ボクのことは『ハイゼンスレイ』と呼んでください」
「それじゃ、そう呼ぶわね。……それで、ハイゼンスレイは自分の能力を異変解決に役立てたいのね？」
「もちろんです！」
「それなら、ここで修行なさい。ここなら、幻想郷を包んでいる霧の影響は強くないから」
そうしてボクは自分の能力を拡張するために、修行に励むことにした。
☆★☆★☆★
――時間と空間を静止させられるから、納得の行くものにするのに、そんなに期間はかからなかった。
時間と空間を静止する他、少しだけの先を予測する力、数石前から数秒前を消し飛ばしたり巻き戻すことができるようになった。
背中の扉は紫様がスキマのシールで封をして閉じられている。
「……ありがとうございます、紫様。それではボクは異変を解決しに行ってきます」
「ええ、気をつけて頂戴。……でも、その前に、霊夢をなんとかしてほしいの」
「はい。ボクが触れた人妖は正気に戻れる。そして、ボクの周りにいれば霧の影響を受けない……でしたね」
「その通りよ、ハイゼンスレイ。私からもお願いするわ。この霧の異変の解決を」

Ｓｔａｇｅ１．　少女綺想曲　～　Ｃａｐｒｉｃｃｉｏ

紫様のスキマで、博麗神社へジャンプしたボク。
幻想入りした時は、人里の空き家に落ちたので、ここに来るのは初めてだった。
紫様曰く、博麗神社は幻想郷と外の世界の境目にあるのだという。そして、博麗大結界というのもある。
ボクみたいな外来人が幻想郷に行く場合、大結界の裂け目に落ちる、紫様が気まぐれで開けたスキマに落ちる……の二つしかないらしい。
さて、博麗の巫女たる博麗霊夢はどこにいるかな。
境内に入っていくと、しんと静まり返った空間に、ひとり、黒髪の美少女が座っている。
その美少女は腋が露出している紅白の巫女服を着て、胡座をかき、瞑想しているように見えた。
「くっ……はぁ……」
しかし、うまく瞑想できてないようだ。彼女の雰囲気からそんなことを感じた。
「……あなたが、博麗霊夢……？」
「……誰よ、あんた」
「あぁ、ごめんなさい。ボクはハイゼンスレイという、人里にいたただの人間さ」
「ただの人間が……珍しいわね……。妖怪が……ウヨウヨいる……この神社に……。それで……何用……？」
ボクは霊夢の横に腰掛けた。
「……？　なんか気持ちがすぅーっと、楽になってきたのだけど、どういうこと？」
「あぁ。これ、勝手に働くもので、ボクの周囲にいれば、瘴気を含んだ霧の影響を受けづらくなるんです。あと……ごめんなさい、お手を拝

借……」
　そして、霊夢の手に触れる。
「――だいぶ楽になったわ。ホント不思議ね、ハイゼンスレイ。……あんた、本当に人間？」
「人間ですよ。時間と空間を操る程度の能力を持っただけの」
「咲夜と同じ能力を持つのね」
「咲夜……？」
「十六夜咲夜。紅魔館のメイド長をしている女よ。銀色のような短い髪で、おさげを垂らしているし、メイド服を着てるからすぐに分かると思うわ。……それで、ハイゼンスレイがここに来たのは、紫に頼まれたのかしら」
「はい。紫様と摩多羅隠岐奈という秘神のふたりに、異変を解決してほしいと頼まれました」
「へぇ……。それなら、少し休んでから出かけましょ。私も本調子ではないし。ハイゼンスレイも少し休みたいでしょう？」
「お言葉に甘えて」
☆★☆★☆★
　博麗神社の居間で休憩しながら、ボクは全部の事情を話した。
「なるほど。ハイゼンスレイはこの霧の中でも、正気を保っていて、さっき私にしたみたいにすれば、人妖問わず正気に戻ると」
「はい。ボクが時間と空間を操る能力の拡張のために修行していた時に、紫様が調べていたらしくて」
「ふぅん。紫がね……。まあ、それもそうか」
「はい？」
「あいつ自身の口から聞いたと思うけど、紫は幻想郷を誰よりも愛している妖怪だからね。こういうことには本気を出してくれるのよ」
　霊夢は言う。
「それで、ですか」
「隠岐奈まで出てくるなんてね。あの二人がおかしくなったから、出てきたのかしらね」
「そんなことも言ってたような気がします。……なんだかんだで、幻

想郷を気にしているみたいなので、いいことなんじゃないですか？」
「かもしれないわね。ま、とりあえず、私はハイゼンスレイがいなければ、まともに動けないだろうから、よろしくね。あと、私のことは霊夢でいいわ」
「わかったわ、霊夢」
「……で、まあ、霧の異変なら、またレミリアの仕業でしょ。紅魔館に行きましょ」
「レミリア……？」
「レミリア・スカーレット。紅魔館の主で、吸血鬼とか言ってたわね。見た目は幼女なくせして、尊大なんだから」
「へぇ……」
　こうして、ボクと霊夢は紅魔館へ向かうことにしたのだった。
　境内裏を進んでいくと、さっきまで昼だったのに急に夜のような暗闇に空間が染まる。
　霊夢は持っていた札を真正面に何枚か投げた。
「あ、は、あ、あはははあはははあはははあはははっ」
　暗闇が解かれ、頬を赤く染めた短い金髪少女が、狂ったように笑いながら姿を表した。
「あはははは、あはははははっ！」
　気が触れているかのように笑い続ける。
「……霧のせいでおかしくなったやつね。ハイゼンスレイ、危ないから下がって」
「ええ。気をつけてね、霊夢。あと、ボクから離れすぎないでね」
「もちろんよ」
　先手必勝とばかりに霊夢が札を投げる。
　ダメージを受けているように見えるが、おかしな笑いをしながら、金髪の少女は霊夢に迫る。
「……っ、く……。ハイゼン……スレイ……ッ」
　瘴気を含んだ弾幕を受けたせいで、霊夢が助けを求めてきた。
　そこまでの反撃を受けたわけではないのだろうけど、瘴気が混じったせいだと思う。

「霊夢」
ボクは霊夢を呼びかけて、両手をしっかりと掴む。
「ありがとう。助かったわ」
「あは、あはは、あはははははっ」
金髪少女が迫ったその時、ヴィジョンが見えた。
〃〃 金髪少女がボク達に瘴気をばら撒いてくる！〃〃
ボクは霊夢を引っ張って、迫ってきた少女と距離をとった。
「……しょうがない。時空静止「ザ・ワールド」！」
時間が止まる。
狂った笑いを浮かべる少女。それを睨む札を持った霊夢。
世界はグレー一色で、何もかもが止まっている。
霊夢を移動させ、少女をけつまずいたような状態にさせた。
「――そして、時は動き出す」
瞬間解凍するように凍りついた世界が、色と音を取り戻した。
霊夢の目には、金髪の少女がドジって地面に転がったように見える。ボクが時間を静止させて、そう仕向けたのだが。
「……あれ？」
「どうやら、あんたは正気に戻ったみたいね。……ハイゼンスレイ、やってあげて」
「ええ」
金髪少女の手を掴んで起き上がらせた。
「ねえ、私、どうしちゃったの？」
「おかしな笑いを浮かべながら、私達に襲いかかったのよ。……ま、ハイゼンスレイが解決してくれたのだけどね」
「ハイゼンスレイって？」
「あんたの目の前にいる女よ」
「ふーん……。ねえ、」
「はい？」
「あなたは食べてもいい人間？」
黙ってしまった。
「……食べていい人間なわけないでしょ」

霊夢の札がその娘のおでこに当たる。
「うぅ、ごめん」
「いいよ。あなたは妖怪なのでしょう？　そう言ってもそこまで不思議じゃないけどね。ま、気をつけてね」
「うん、ありがとう。……あ、そうだ。あのさ、」
「うん？」
「私の友達も私と同じようにおかしくなっていると思うから、気をつけてね」
「ええ。ありがとう」
ボクは金髪の少女の頭をなでてから、霊夢とともに先を急いだ。

Ｓｔａｇｅ２．　いざ、紅魔館へ

霧の湖。
紅魔館へ行くためには、瘴気の霧も含んだ霧の中を進むしかないらしい。
そして、霧のために視界がすごく悪いという。
湖自体はそこまで広くないらしいが、霧のせいで、広く感じるらしいとのこと。
……が、その湖が凍っている。
「……妖精にも影響を及ぼすらしいわね」
さっきから酔っ払ったようにテンションの高い妖精がこっちを攻撃してくる。
霊夢曰く、妖精はザコなので、そこまで問題にならないらしい。
「――おそらく、チルノが霧の影響で暴走しているのかもしれないわ」
「チルノって？」
「氷の妖精。その辺の妖精よりも無駄に知恵があるせいで、バカ扱いされちゃってる奴だけど、憎めない妖精なのよ。いたずら好きなのは少し困りものだけどね」
「ふぅん。……仲良くできます？」
「できるわよ」
突然、氷弾が飛んできた。
「うわっ」
「――やっぱりね。いるんでしょ、出てらっしゃいな。……隠れているつもりかもしれないけど」
出てきた氷の妖精も顔を赤らめている。
他の妖精と同じようにテンションが上って、暴走しているようにも感じる。
そこで未来予測が発動。
〃〃スペルカードで攻撃してくる！〃〃
「氷符「アイシクルフォール」！」
未来予測は正しかった。氷の弾幕が飛んできたのだ。

「うおっ、やっべ。やっぱ、予測したとおりだった」
予測は弾幕の軌道も見せてくれていた。いわゆる安地で回避する。
（くっそ。時間静止、未来予測、時間の巻き戻しだけで満足した自分がバカだった。チルノをバカにできない。これじゃ、攻撃できないじゃないか）
また、予測が脳裏によぎる。
（こいつ、また、スペカを!? つか、ボク狙いかい！）
予測は、〃〃でっかい氷の塊がボクめがけて飛んでくる！〃〃
「くっそ……ここまでか……」
その時、大きな陰陽玉がボクの両脇を通り抜け、チルノに直撃してふっとばした。
「はぁ……。ぼさっとしてないの。弾幕勝負だからといって、あんたが死ぬかもしれないのよ」
「ご、ごめん……」
ちなみに予測で見たでかい氷の塊は生成途中だったせいか、当たることはなかった。
「……うーん。あたい、どうしてたの？」
「気が狂ったように攻撃してきたのよ、私達に」
「そっか。悪いことしたな。ごめん」
「いいのよ。どうせ、このクソ霧が悪いんだから。さてと、先に進ませてもらうわよ」
さくっと先に進むボク達だった。
☆★☆★☆★
霧の湖を抜けた先が、紅魔館らしい。
見た目は立派な洋館だとわかった。――でも、昔の日本のような雰囲気が多い幻想郷にはなかなか似つかわしくないな、とボクは思っていた。
「ここが紅魔館よ。……さて、門番はっと」
背が高くて、腰まである赤くて長い髪の毛。前の方をお下げでまとめて下げている。
チャイナドレスっていうのかな、あれを。……そういう衣装を身に

まとっている、スタイルのいい女性だった。
——少し残念なのは、間抜けな顔で船漕いでいるってことぐらい。
「寝てる……」
「ってか、こんなクソ霧ン中、よく寝れるわね……感心しちゃうわ」
呆れた霊夢が言う。
「おい、門番」
「……んあ」
立ったまま寝ていた女性が目を覚ました。
「あ、あぁ、霊夢さんじゃないですか。どうしたんですか？」
「あんたのとこの主に会いに来たのだけど、大丈夫かしら」
「それはいいですけど、前もって約束とか……してなさそうですね」
「しょうがないわよ。急なんだから。……というか、この頭おかしくなるような霧が立ち込める中、平気でいてられるわね」
「なんででしょうね？　それは私もわからないです」
マジかよ。
「ま、とにかく、通してもらいたいのだけど」
「……ええ。その代わり……」
「……ハイゼンスレイ。あんた、時を止めれたわよね？　してもらえるかしら？」
「かしこまり～～～」
時空静止「ザ・ワールド」を発動。
ボクの周りの空間がすべて静止して、グレー一色になる。
構えをとっている門番。扉ギリギリに浮遊している霊夢。
（霊夢が時を止めて、中に入れさせろってことっていうのはわかってたし）
ちょんと押して、霊夢を門の上に立たせた。
「そして、時は動き始めるの」
ぎゅーんっ。
凍っていた時間と空間が瞬時に解凍されていく。
霊夢は、紅魔館の敷地に入っていた。
止まった時の中でジャンプしていたボクは、そのおこぼれにあや

かって、入ることができた。
「あーっ！　そんなことをしたら、私がお嬢様や咲夜さんに怒られちゃいますよーっ！」
「ごめんなさい、門番さん！」
門番の女性が気がついた時には、私達は紅魔館の敷地に足をつけていたのだ。
☆★☆★☆★
そして、紅魔館と呼ばれている屋敷を目の当たりにする。
改めて見ると、立派な洋館で、幻想郷の雰囲気にはミスマッチだった。
「さて、行きましょうか、ハイゼンスレイ」
「かしこまっ」
紅魔館エントランス。
……しかし、なにか違和感を覚える。侵入者がいるのに、誰ひとり出てこようとしない。
「霊夢、不用意に踏み込まないで」
「どうして？　先に進まないと」
「……足元にピットがあるかもしれない」
「ピット？」
「落とし穴って意味、だったと思う」
落とし穴、と聞いて、試しにと霊夢が片足を踏み込んだ。
ガコンッ！　という音がして、踏み込んだ床が抜け、正方形の暗闇が見える。
「あー、なるほどね。これで地下に真っ逆さまってことか。けど、こんなのビビって先に進めないのは、どうにもシャクよね」
「まあ、わかりますけど。……とりあえず、予測を立てますね」
「予測～？　ハイゼンスレイ、あんた、時を止めるだけじゃないのね」
「はい。攻撃だけできません」
「へー……。安全に探索する向けの能力ね」
まあ、褒められてもあんまり嬉しくないけど。いざという時に自分を守りきれるか不安だし。

予測を立ててみると、このまま真っ直ぐ進むと落ちる。でも、右に避けると落ちる。
「正解は……左！」
セーフ。
でも、次は〃〃どう踏み込んでも落ちる！〃〃という予測。
「……どうしたの、ハイゼンスレイ」
「霊夢……。この罠、めちゃくちゃ巧妙……。次は左だろーが右だろーが踏み込んでも落とし穴トラップにかかって地下送り」
「……なら、もう観念して落ちましょうか」
「それも一興……ですね」
ガコンッ！
落とし穴トラップが見事に作用して、地下に落ちるボクと霊夢。
落ちた先は、本棚が大量にある部屋だった。
「……まだ、安全だったわね」
「安全？」
「あぁ、レミリアに妹がいてね、フランドール・スカーレットって言ってたかしら。あの妹は危ないわ」
「どう危ないんですか？」
「簡単に言えば、あらゆるものをぶっ壊すやばい女なのよ」
ゾッとした。
「形あるものだったら、造作もなく壊してしまうのよ」
「ひえっ……」
「だから、ここが――。……あれは」
ボクと霊夢の目の前に、浮遊している女の子と、ボロボロの黒い服を着ている金髪の少女がいる。
（……というか、この世界の女の子、金色の髪の毛多すぎ。何人いるんだよ……）
「ふふっ、魔理沙。もう限界かしら」
「くっ……」
「まあ、無理もないわね。貴方程度の魔法使いでは、瘴気に包まれたままじゃ、本来の実力も発揮できないでしょうね」

「う、うるさ――。うわっ」
水色の弾幕に押し飛ばされる魔法使い。
「――！　魔理沙じゃないの！　どうしたの、一体！」
「あ、あぁ……霊夢、か。ははは、死中に活を求めるってか？」
ふっとばされた彼女を受け止める霊夢。
魔理沙と呼ばれた少女は、ボロボロな上に、顔が赤い。
「……ごめんなさい」
瘴気の霧を浴びたせいだとわかったボクは魔理沙に断りを入れて、身体に触れた。
「ん？　なんか、身体が軽くなったな？」
「まさか、魔理沙があのクソ霧ン中をここまで」
「あぁ。空高く飛び上がって、ここまで来たんだ。まあ、そのせいで、こんな目に遭っちまったけどな。
霊夢とそこの女、今のパチュリーはやべーぜ。絶好調すぎて、私の魔法がてんで効かねえ。おまけに、こっちが絶不調でな。笑うことしかできねえんだわ」
「わかったわ。あんたは少し休んでなさい」
――時空静止（ザ・ワールド）!!
突然、なにかの殺意のような邪悪な意思を感じて、とっさに時間を止めた。
霊夢と魔理沙の背後から、小さくとも悪魔の翼の生えた女の子が尖った爪を突き立てようとしていたのだ。
「ふぅ。悪いけど、そんなことは許さないよ」
明らかな殺意を感じたボクはその女の子を蹴って、位置をずらした。
「時間よ、動け」
凍った空間が、解凍されていく。
「あれーっ!?」
空振りに終わったせいで、疑問の声を上げる少女。
「あっ」
「なるほど、闇討ちってわけか」

「――作戦は失敗だったわね、小悪魔」
「申し訳ありません～」
「しっかしよ、パチュリー。恨まれるってぇのはわかるけど、ここまでするこたぁねぇだろ？」
「――それぐらい私は怒っている、そう思ってくれればいいわ」
「はぁ……。定期的に借りた本は返してるだろ」
「それはそれ。これはこれ、よっ」
　弾幕が飛んできた。
　でも、その弾幕はボク達を直撃しなかった。
「結界を張れる巫女、舐めんじゃないわよ」
「そうだった……」
　霊夢は博麗の巫女であり、博麗大結界を調整することもできる巫女だった。
　そりゃ、結界はお手の物ですよね～という気持ちになった。
「さて、どうするか、よ。動かない大図書館があんなに活発に動くなんて」
「……失礼かもですけど、そのパチュリーさんって魔法使いなんですよね」
「あぁ、そうだぜ」
「じゃあ、身体能力はお察し……ですよね」
「まあ、そう、なるな。……ってか、お前、結構ズバズバ言うのな」
「だから、失礼かもって言ったんですよ、魔理沙さん」
　ボクは無謀にも絶好調のパチュリーと呼ばれた少女の前に立つ。
　紫色の長く伸びた髪。ダボッとした衣装をしているように見える。
　そして、瞳も同じ色をしている……と思ったけど、それがとても濁った色をしているように見えた。
（この人は金髪じゃなくてよかったァ……。金髪地獄かと思っちゃったわよ）
「あら。見たこともない人間ね」
「はい。ボクはハイゼンスレイというただの人間です」
「そう。……ただの人間が咲夜のように時間を止めるなんてできるの

かしら。油断させようという魂胆？」
「そう思っていただいても結構です。――でも、ボクの時間停止は……空間すらも凍らせます」
「へえ……。面白いことを言うのね、貴方。なら、少し試してみようかしら」
パチュリーは弾幕を飛ばしてきた。
そのタイミングで時空静止（ザ・ワールド）を発動させる。
（……！　誘われた！）
空間すらも凍らせられる時間静止の中でも、弾幕が動いてくる！
「チィッ！」
なんとか避ける。
未来予測（フォーレキャスト）で、次の一手を推測する情報を得るボク。
〝〝時間静止解除直後に別の弾幕が飛んでくる〟〟
（なんだこの予測？！　……仕方ない！）
自分が打った時間静止する前の時間へと巻き戻した。
「へえ……。面白いことを言うのね、貴方。なら、少し試してみようかしら」
パチュリーが弾幕を飛ばすタイミングまで戻ってきたか！
軌道は読めているから、グレイズするボク。
「あら。時間を止めなかったのね」
「いや、時間は止めました。でも、回避できなかったので、時間停止したことをなかったことにしました」
「……フフッ。本当に面白いのね、貴方って人間は。じゃあ、これは……どうかしら！」
別の弾幕を飛ばしてきたパチュリー。
なるほど、さっきの予測はこれだったのね！
上と左右から飛んでくる弾幕。
時間を切り取れるなら、空間も切り取れるんじゃないかしら、と考えたボクは、空間を切り取ることをイメージした。
――ガオンッ！
ボクの目の前で弾幕がなかったことにされた。

「フフッ……。本当に面白い……本当に面白い人間ね！」
「……やべぇ、あいつ、狂ってやがる」
魔理沙が言う。
「え」
「パチュリーはあんな雰囲気をして喋るヤツじゃないんだよ。……で、お前、名前は？」
「ハイゼンスレイというの。自己紹介が遅れてごめんなさい」
「いいって。……あ、私は霧雨魔理沙だ。魔理沙でいいぜ」
「それで、魔理沙。本来のパチュリーっていうのは？」
「かなり大人しくて、落ち着いた喋り方をするんだよ。どこか気だるそうでな。……でも、今のパチュリーは何者かに操られるかのように喋ってやがるから」
「あぁ、なるほど。……魔理沙の道具って借りれる？」
「あぁ、こいつか？　魔力がないと使えないぜ。ハイゼンスレイに使えるか？」
「ダメでもともと、だから」
魔理沙からミニ八卦炉を拝借するボク。
「ふふっ……魔理沙の八卦炉を借りただけの人間になにができるというの？」
「さてね。……でも、ボクはむざむざやられたくないの！」
外の世界で見たことがある。魔砲少女の伝説を。
イメージしてできることがあるのなら、ボクはそれに賭ける！　分の悪い賭けは……嫌いじゃないの！　でも、なにか出なきゃ負けちゃうんだから、お願い……！
「なんでもいいから出て―っ！」
強く念じたボクの手にした八卦炉からごん太のビームが放たれる。
……というか、これ、マスタースパークではなく、本当に魔砲少女の必殺技なのでは……と思うほど、色合いも威力も違うけど、怯んだ狂気のパチュリーには有効打だった。その直撃を受けた彼女は気絶。
「あぁ、ごめんなさい。大丈夫？」
八卦炉を返して、パチュリーの手を掴むボク。

「……ええ。貴方こそ、大丈夫なの？」
「まあ、ボクはそこまで。それよりも、パチュリーさんが正気に戻ってくれてよかった」
「は？」
「もしかして、狂気になっていた時の記憶ないんですか？」
「狂気……？　私が？」
パチュリーの言葉に頷くボク。
「そうだぜ。んで、私をこうになるまでボコボコにしてきたんだぜ」
魔理沙が言う。
「……あー。まあ、でも、魔理沙の場合は自業自得だから」
「うっ……。ま、まあ、そう言われるとなんの反論もできねえわ……」
「そう……。私が狂気……ね……。あぁ、そう言えば、門番の美鈴はなんともなかったの？」
「ええ。私とハイゼンスレイが来た時は、正気だったわよ。まあ、強行突破しちゃったけどね」
「なるほど。美鈴は無事……。って、待って。外はここよりも霧が濃かったはずなのに」
「そうよ。パチュリーが言うように外はクソ霧がすごかったわ。ハイゼンスレイがいなかったら、私だっておかしくなっていたかもしれないし、ここまでの道中で気が狂ったりおかしかったりしたヤツを見てきたわよ」
「……人妖を狂わせる原因が、確実にあるはず。小悪魔は？」
「ここにいます～。パチュリー様、ご無事ですか!?」
「ええ。貴方にも迷惑をかけたみたいね」
「いえ、滅相もない！」
「それでひとつお願いがあるのだけど、いいかしら」
「なんなりと！」
「……私がおかしくなる前に、なにか本を触っていなかった？」
「えーっと……。これでしょうか？」
小悪魔がテーブルから持ち出したなにかの本。
それはピンク色であり、なにやらやらしいことが書いてありそうな

雰囲気があった。
「……うっ！」
　思わず拒絶反応を見せるパチュリー。
「……でも、これではっきりしたわ。私が狂気に溢れた表情をしていた原因は」
「とすると、この魔力、というか、瘴気に触れてしまって……」
「それは十分にありえるわ。……そして、この瘴気が原因で発生して、紅魔館にも溢れているとするのなら……。――霊夢、ハイゼンスレイ」
「レミリアをまた、懲らしめればいいんでしょう？」
「貴方にはそういう言い方がわかりやすいかもしれないわね。……お願い、レミィを」
「ええ。あんたの友人だったっけ、レミリアは。……わかってるわよ」

Ｓｔａｇｅ３．　メイドと血の懐中時計

ボク達は、地下から再び、紅魔館エントランスへ。
ピットトラップは機能していなかった。どうやら、パチュリーが狂気に囚われていた時に仕組んだらしかった。
先へ進んでいくと、空間が凍りつく感覚を覚える。
ボクが時を止めたときに感じるモノだ。……つまりは。
「……！」
真っすぐ飛んできたナイフを振り払う。
「あら、動けるのね。私が時を止めた世界で……」
「こっちも、時間を止めることができるから。……あなたね。紅魔館のメイドの十六夜咲夜って」
「御名答」
時間が解凍していく。
確かに霊夢の言っていたとおりの見た目をしている。
ただ、目の色は赤く、濁っていた。
パチュリーも狂気に包まれていたときも、目の色が濁っていた。
……咲夜も狂気に包まれているか、瘴気の霧を浴びてしまったか……。
「あなた達。悪いけど、ここから先は行かせないわよ」
「ふん。そう言うだろうと思ったわよ。……でも、あんたが時を止めるのなら、ハイゼンスレイにやらせるしかないわね」
「霊夢が珍しいことを」
「シャクだけどね、今回の異変はハイゼンスレイがいないと、私だってまともに動けないのよ」
霊夢……。
「ってことだから、これ、使ってみなさいな」
霊夢はボクに「博麗」と書かれた札を渡した。
「ハイゼンスレイが、魔理沙の八卦炉を持ってマスパの真似事をしたみたいに、と思ってね」
「あぁ、あのチートまがいの……」

「攻撃手段を持たないって言ったわよね。それを変わりにしてちょうだい」
「わかった。ありがとう、霊夢」
「さて……それじゃ、行くわよ！」
　早速、時間が止まった。
「時が止まった世界で動けるのは、あなたと私だけ。霊夢の助力は借りれない。さあ、どう戦うつもりかしら？」
「そうね……。この札、どう使うのか聞きそびれちゃったけど、……!?」
　渡された札のひとつがヒトガタを型どり始める。
「この姿を見せるのは久しぶりかしら」
　そのヒトガタは、今の霊夢のような変形した巫女服ではなく、ちゃんとした（というのも変かもしれないけど）巫女服を着た少女の姿だった。
　髪の色はパチュリーのように紫色をして、霊夢と同じ大きなリボンをつけている。
「えーっと、あなたは？」
「私？　私は博麗靈夢よ」
「えっ、霊夢!?　え、どうして!?」
「さて、なんででしょうね？　じゃあ、あなたに質問。『あっち』の霊夢が『こっち』の霊夢と同一人物だとしたら？」
「――あぁ、そっか。ともかく、時の止まった世界で動けるなら、力を貸してほしいの」
「いいわよ。『あっち』もそのつもりであなたにお札を渡したでしょうから」
「……ッ！　まさか、そんなことがっ！　でもっ!!」
　ナイフを投げる咲夜。向こうが時を止めてきたので、ボクは時を止め返すしかない。
「時空静止「ザ・ワールド」！」
　時間を止め返す。紫霊夢は、こちらの霊夢と同じように札と陰陽玉を咲夜に向かって放っている。

ナイフの挙動はそれである程度逸れる上に、静止している霊夢に当たらないようになっていた。
ボク自身へのナイフも弾き飛ばせたけど、相手の時間静止の中を動いている。反発する力で時間静止を制御できない。
（ここが限界、か……）
「ふふっ……。時間を止め返したとは言え、持続時間は私のほうが上なわけね……。そして、時は動き出す」
紫霊夢は札に戻ってしまった。彼女が放った札と陰陽玉のおかげで、霊夢にはダメージはない。
ただボクにはナイフが何本か身体に刺さってしまった。
「――ふんぬっ！」
カラン、と、ボクの血がついたナイフが転がる。
深く突き刺さっていないから、少し気合を入れるだけで抜けた。
痛いことは確かだし、血も出ている。
「っ、く……。しこたま投げてくれちゃってぇ……もうっ……」
「立ち上がれるのね。ふふっ」
「当たり前よ。ボク達はあなた達を懲らしめるために来たのだから！」
出血は続いているが、これしきの痛みでへこたれるわけにはいかない。
「それじゃ、『一回休み』になってもらうわよ！　幻世「ザ・ワールド」！」
時間が凍りつくのを感じた。
それは未来予測（フォーレキャスト）で把握済み。いいタイミングで時を止め返して、反撃する……！
時間を止める吸血鬼に対して、同じ能力を偶然獲得した人間のようにね……！
そして、咲夜は雨あられとナイフを投げつけてきた。
（動ける動けない関係なしに処刑する方法、ってか……！　なら、ボクは『空条承太郎』のように動くだけよ……！）
……なんでボクは自分の真名だけしか思い出せないんだろうね。

こんなことは覚えているっていうのに。
「そして、時は動き出す」
　咲夜が時間停止を解除したが、凍った時は戻らなかった。
「……なぜ!?」
「――教えてあげますよ、十六夜咲夜。あなたが解除を口にした瞬間に、ボクが時を止め返しました」
「く……。身体の動きが……ッ」
「では、ナイフはすべて弾かせてもらいますね。霊夢さん」
「任せてちょうだい」
　凍った空間に陰陽玉が跳ね回る。
　すべてのナイフがその衝撃で明後日の方向に飛んでいく。
「それじゃ、っと!」
　吹き飛んだナイフをいくつか投げ返した。
「そしてェ時はァ動きィ始めるゥ」
　たったひとつのセリフでその人だと認識できるような声を出しながら、時間停止を解除すると、色と時間が戻っていく。
　投げ返したナイフが咲夜に突き刺さる。
「くっ……!　申し訳ありません、お嬢様、旦那様……ッ」
「さてと、それじゃ、ごめんね、咲夜さん」
　掴んだナイフの柄で咲夜を思いっきり殴った。その場に倒れ込む彼女。
「……っ」
「気がついたらしいわね、咲夜」
「……ええ。ところで、私はなにを?」
「あんたも瘴気の霧とかいうクソ霧でおかしくなっていたのよ」
「霧でおかしくなっていた……のね」
「そうよ。自分がおかしくなる前になにか起きなかったかしら」
　霊夢が言う。
「なにが起きていた、か……。お嬢様が悪魔の羽をはやした男と一緒に私のところに来て、までは覚えているの」
「じゃあ、その男が悪いってことになるわね。……見えてきたわね。

この異変の背中が！」
「霊夢？」
「そうと決まれば、咲夜、レミリアのところに案内してちょうだい。ハイゼンスレイから離れないようにね」
「ええ、わかったわ」

Ｓｔａｇｅ４．　ツェペシュの幼き末裔と黒い男

紅魔館の庭に出てきたボク達。瘴気の霧が最も濃く、ボクですらも参ってしまいそうになる。
庭に出てきた時点で、咲夜を紅魔館に残してきた。ボク達が荒らしてしまった故である。
「霊夢、大丈夫……？」
「大丈夫、じゃないわよ……。ハイゼンスレイ……あなた、私の心配より、自分の心配を、したら、どうなの？」
「う、そう、かも……」
だめだ、自分の能力が使えない。未来予測も、時間静止も、十分に使えない。
（このまま、瘴気の霧で、霊夢を、襲うなんて、嫌だ……）
その時、霊夢が何かを思いついたのか、ボクに抱きついてきた。
「もしかしたら、と思ったのだけど……」
「霊夢……？」
「女の子同士だし、別にいいんじゃないかなって。……多分、ハイゼンスレイの方が年上かもしれないけど」
「ありがとう、霊夢……」
不思議と気持ちが軽くなっていく。
自分が彼女達にしてきたことを返してもらっただけなのに。
「さ、行くわよ。私はハイゼンスレイから離れないから」
「……私もいることを忘れないでね？」
二人の霊夢ってか!?
「は、ははは……。ありがとう、二人の霊夢」
「それはこっちのセリフよ」
同じことを思っているからか、黒髪霊夢と紫霊夢が言う。
しばらくして、丸く大きい月を背に二つの小さな影が現れた。
二人とも、羽を生やし、浮遊してる。
片方は、白い特徴的な帽子に赤いリボン。洋服も同じように白色で短い紫色の髪。

もう片方は、羽が宝石のようになっていて、白い特徴的な帽子に赤く細い糸をちょうちょ結びにしている。
そして赤色の服装を身にまとい、金色の短い髪の毛をしている。
「……レミリア・スカーレット！」
「あら、彼の仕掛けたすべての罠を潜り抜けてきたのね」
「ええ、そうよ。――一度、懲らしめてあげたのに、まだ懲りないのね、レミリア」
「そうなるわね。さしずめ、今回は復讐と言えばいいかしらね」
「あー？　なら、もう一度懲らしめてあげるわ、レミリア・スカーレットッ！」
先手必勝とばかりに、針状の弾幕をレミリアにこれでもか、と投げつける霊夢。
しかし、大きな炎の剣にすべてが薙ぎ払われてしまう。
「禁忌「レーヴァテイン」」
「……ッ、フラン、あんたもいたのね」
「うふふ……あはははっ！　遊ぼう！　私の弾幕で壊れちゃわないでよね！」
フランって子はまともに話ができなさそう。
最初に出会った妖怪みたいに狂ったような笑い方をしている。
「禁忌「フォーオブアカインド」」
フランが経験値泥棒忍者みたいに四つに分裂した!?
「紅符「スカーレットシュート」！」
レミリアからも弾幕!?
「くっ！　時空静止「ザ・ワールド」!!」
フランの分身、レミリアの弾幕がすべて静止した。
「フゥ……間に合ってよかった。霊夢さん。あなたからすれば厳しいかもしれないけど、お願い！」
「ええ、任せてちょうだい」
紫霊夢は札と陰陽玉を放ち、弾幕をかき消した。
「……チッ。ここまでしか止められないか！」
レミリアからの弾幕を消すのが精一杯だった。

「あははははっ！」
「あはははっ！」
「あはははっ！」
「あはははっ！」
　四体のフランが一斉に赤く熱を持つ杖のようなものをボクと紫霊夢に振りかざしてきた。
「――南無三!!」
　ボクが最期に見た光景は赤いレーザーが薙ぎ払うように飛んできたものだった。
★☆★☆★☆
　向こうには三途の川が見える。
　そうか。ボクはフランのフォーオブアカインドで命を落としたんだな……。
　誰かが呼んでいる。こっちにおいで、と。
　そこへ足を踏み入れようとした瞬間。
「おっと。あんたは来ちゃだめ」
　紫様のようにスタイルのとてもいい、フォーテールの赤い髪の女性がボクを止めた。
「え、なんで」
「あんたは未練が多すぎる。このまま彼岸に行って四季様の裁きを受けても決して浮かばれないよ。お説教も長いよ～？」
「じゃあ、このまま待てばいいの？」
「あたいはそういう事を言いたいんじゃないんだ。んー……。あ、そっか」
　考え込んだその女性は、しばらくして、ポン、と手を叩く。
「こうすれば――よかったんだ！」
「えっ、ちょ、おまっ」
　女性は後ろからボクの背中を思いっきり蹴った。
「うわあああああ」
「じゃ、現世に戻って、ちゃんと天命を全うするんだよー。……あ、でも、あたいのしたこと、四季様にバレたら、また叱られるかも……。

ま、いいっか。やっちゃったことはどうにもならないし」
★☆★☆★☆
目を覚ますと、時間が巻き戻っていた。こんな巻戻りのやり方があるんかい、と、ボクは思ってしまう。
フランのフォーオブアカインドが迫るその瞬間で時間が巻き戻り、おまけに停止していたのだ。
意識の回復のついでに、未来予測が発動する。
〝〝どうせ　みんな　いなくなる〟〟
――なんだ、この、アバウトな予測は！
みんないなくなる？　どういうことだ？
――ガキィィィィ……ンッッ!!
予測に困惑していると、結界が四つの杖の攻撃を防いだ。
「……霊夢！」
「やれやれ。なんとか間に合ったみたいね」
「すごいね、『あっち』の霊夢」
「まあ、私ならこれぐらいはできるわ。……もし、あなたが過去の私なら、未来の私はこういうこともできるようになるから」
「そっか。……なら、私は彼女を守る」
「そうね。お願いするわ」
紫霊夢が、ボクの前に立った。
「元々、私は今の博麗の巫女が札に眠る霊力を持って存在を確立している……。だから」
「……短い間だったけど、護ってくれてありがとう」
「いいのよ。これは、今の博麗の巫女の意志なんだから」
放たれたレミリアとフランの同時攻撃から、紫霊夢はボクを護って、かき消えるようにその存在を消してしまう。
「ひとつ……札が燃えてしまったみたいね」
「……うん」
「でも……博麗霊夢はここにいるわ。ハイゼンスレイ。異変解決に燃える博麗の巫女がね！　安心なさい。異変は確実に解決してみせる！」

「――そうだったね。霊夢……！」
その時、ボクに不思議なことが起きた。この感覚は……！
「『時霊符「夢時間の封鎖」』」
鎖のような弾幕と、霊夢の札の弾幕がレミリアとフランに飛んでいく。
それは幼き悪魔二人の動きを止め、拘束するには十分の強度を持つ弾幕だった。
「……っ！」
「何、これっ……！」
フランは自身の能力で鎖を破壊しようとするが、その度に鎖が飛び出し、彼女を捕縛し続ける。
「う、動けない……ッ！」
「……許してね、二人とも」
鎖を解除すると同時に気絶させる。
それと同時に、瘴気の霧の状態が解除された。
「……うーっ」
「うーん、頭がいたーい。あれ、私、何をしていたんだろう」
「フラン……だっけ。ボクを『一回休み』にさせたんだよ？」
「そう、だったんだ」
しばらく考え込むように唸ったフラン。
「……そっか……。お姉様、起きてる？」
「ええ、起きているわ。どうしたの、フラン」
「正気に戻ったところ、悪いのだけど、今から私の言う方向に神槍「スピア・ザ・グングニル」を投げてほしいの」
「……ふぅん。いいわよ」
正気に戻ったレミリアは、スペルカード神槍「スピア・ザ・グングニル」を発動させ、その槍をフランの言った方向に投げた。
その槍弾幕は、霧の向こうにいるヤツに命中した。
「クックックッ……。紅魔館の連中はおろか、この世界の生命体を狂わせて操る遊戯もこれで終わりか」
細身で長身の悪魔が桃色の瘴気の霧の中から現れた。

「あんたがすべての元凶ね」
「お察しのとおりだ、博麗の巫女。俺がこの霧の異変を起こしたのさ。面白い遊戯だったよ。……ただひとつの問題点を除けばね」
　その悪魔はボクをキッとにらみつける。お前さえいなければ、みたいな顔をしている。
「……ボクのことを言っているのか、貴様」
「あぁ、そうさ。まさか、お前みたいなのが、博麗の巫女と手を組んで解決してしまうとはね。全く……。
　スカーレット姉妹を洗脳して、お前を亡き者にしてやったのに戻ってきや……ぬがっ!?」
　スキマから交通標識がニョッキリ姿を表す。
　その標識は、男の顎を的確に撃ち抜いた。
「あ、あぁ、忘れていたよ。スキマの存在を!」
　男が手を伸ばそうとした瞬間、スキマは閉じてしまい、攻撃できなかった。
「ぬっ!」
「ようやく、その正体を表したわね。やれやれ」
　スキマから、紫様と背中にしっぽを生やした道士服を着て、特徴的な帽子をかぶった女性が現れる。
「幻想郷を乱した張本人が姿を表してくれたのなら好都合。もう、ここまで来たのなら、私が貴方を亡き者にしてあげるわ」
「そういうことだ。覚悟してもらおう。……紫様」
「ええ、わかっているわ。式神「八雲藍」」
　紫様はスペルカードの弾幕として、しっぽの生えた女性を使役したのだ。
　悪魔の羽をはやした長身の男は、消し飛んだように見えたが。
「ぐっ……しまった……」
　自身を小さな悪魔にバラしていたのか、弾幕を回避し、八雲藍と呼んだ女性を捕まえる。
「さあて……。こいつは八雲藍と言ったか。ふっ……」
「あ、ぐっ……き、さまっ……!!」

「藍!?」
男から解放された藍の目は生気を失っている。
そして、藍は主たる紫様を掴み、その男の前に差し出したのだ！
「――!?」
驚く紫様。
「式神が裏切るなんてことあるの!?」
「私の魔力にかかれば、洗脳なんぞ容易いことさ」
「お前……ッ」
「ふんっ。幻想郷の賢者だとかなんとか、長く生きている最強の妖怪だとかなんとか言っても、女の肉体を持っているのなら、私の魔術でどうとでもなってしまうのだよ！　フハハハ！」
同じように紫様も生気を失った目をしている。
その時。
ボクの中で何かがプチッ、と切れる音がした。
「……わかった。わかったよ。ボクがこの場にいる理由。そして、ボクが異形の力を持ったのか。そして、クソ野郎の影響を受けなかった理由……。そうか……。そして、ボクがこの幻想郷に来た理由。すべてがわかった」
「な、なんだ、こいつ……。周りの女とは違うオーラを放っている……!?　な、なんなんだ!?」
焦った男は紫様と藍を差し向けるが、立ち込める強いオーラで二人は近づけなかった。
「もう、異変解決とか関係ない。目の前のクソ野郎をボコボコにしてやりたい。それだけだ……！」
『我は汝。汝は我だ。――さあ、我よ。名前をつけて叫ぶがいい』
「そうね。――あなたの名前は、今からスプリング・タイムよッ!!」
語りかけてきた人形がボクの前に現れる。その姿は、力強い妖怪のようにも見えた。
でも、これはボクの精神的イメージなのだろう。ヤツをぶっ倒せるほどの力を持った。
「スプリング・タイム！　フォーレキャストッ！」

未来予測。洗脳された紫様が藍を差し向けるイメージが脳裏をよぎるッ！
「無駄だァッ！」
時間と空間を切り取り、紫様と藍を退かせる。
「は、ハイゼンスレイ!?」
「霊夢ッ！　レミリアとフランを下がらせてッ！　今のボクは自分でも怒りをコントロールできない！　あなた達に最悪危害を加えるかもしれないッ！　それだけは避けたいのッ！」
「わ、わかったわ！」
霊夢に頼んで、レミリアとフランを退かせた。
「おおぉぉぉぉっ！　スプリング・タイム！　あのクソ男の顔面をぉぉぉ、ぶち抜けぇぇぇっ!!」
「応!!」
スプリング・タイムは、クソ男めがけて飛んでいく。
そして、豪腕の一撃を顔面に食らわせた！
「おげぇっ!!」
拘束呪術が解けたのか、紫様と藍の意識が戻る。
「さぁてっと……」
怒りを立ち込めたまま、ボクは男に近づく。
「覚悟はできてンだろ～～～なァ？　このボケナス」
「……き、貴様ぁッ」
細腕を伸ばしてきたが、スプリング・タイムがその腕をへし折った。
「うげっ!?」
「アタシにそんなヘボ呪術が効くと……思ってるのかァァァ！」
右、左、と拳骨を浴びせる。
「うげっ、おげっ」
「さあ……懺悔しな、このクソ野郎！　あの世で、四季様とやらに裁かれなッ！」
ポイッ、と、その男を空高く放り上げる。
「スペルカード発動！　豪腕「裁きの乱撃」ッ!!」
スプリング・タイムは弾幕として男の全身を攻撃していく！

「いいタイミングよ……。フフッ。「無人廃線車両爆弾」」
　そして、正気に戻った紫様がスキマから廃線を呼び出し、追撃を食らわせる。
「いい感じにしてくれるじゃない、ハイゼンスレイ。最高よ、貴方」
「お褒めに預かり、恐縮です」
　その男はスプリング・タイムと廃線の両方にふっとばされ、ボク達の前から姿を消した。
「……これで一件落着ってことね。最後はハイゼンスレイがブチギレたって感じだったけど」
「けど、ハイゼンスレイがいなかったら、ここまでスピード解決はできなかったと思うけど、霊夢？」
「それは……そうね。それに、後始末をしないといけないわね」
「――それには心配は及ばないわ、霊夢」
　トランプと共に、咲夜が現れた。
「掃除はすべて終わらました。いかがわしい書籍は廃棄処分……というより、焼却処分したわ」
「これで何もかも終わりってことね……。あとは」
　みんなが見ている前で胡座をかき、無抵抗の意志を見せる。
「何をしているの？」
「霊夢。あなたは人間が妖怪になることは許せないのよね」
「ええ」
「なら、ボクはその傾向がある」
「でしょうね」
「それなら、あなたは博麗の巫女としての最後の責務をする必要があるんじゃあ、ないのか？」
「何を言っているの、ハイゼンスレイ。あんたがいなかったら、異変はこんなに早く解決できなかった。それに、紫が最終的にあんたを焚き付けたのでしょう？　仕方のないことなら、黙認するわ」
「……そうか。いいのね」
「いいのよ。まあ、ハイゼンスレイさえよければ、博麗神社の居候として迎え入れてもいいわ」

霊夢はボクに手を差し伸べた。ボクは掴んで立ち上がる。
「ありがとう。でも、ボクは幻想郷の見聞を広げてみたいんだ」
「そう。なら、いつでもいらっしゃいな」
「ありがとう、霊夢。行こう、スプリング・タイム」
「どこへ？」
「どこだっていいさ。幻想郷の中ならさ」